

SETOUCHI 型長期滞在観光の可能性

済美平成中等教育学校

多賀谷直樹 渡部美咲 渡部実希 権名津歩希 西山和歩

1、はじめに

万国博覧会の団体旅行やリゾートの海外旅行など観光旅行業を初めて行った近代ツーリズムの産みの親、イギリスのトマス・クックは瀬戸内海を以下のように表現した。

“私はイングランド、スコットランド、アイルランド、スイス、イタリアの湖という湖の殆ど全てを訪れているが、ここはそれらのどれよりも素晴らしく、それら全部の最も良いところだけとって集めて一つにしたほどに美しい。”
(ピアーズ・ブレンドン『トマス・クック物語』より)

この記述が示すように、瀬戸内の風景美は近代の欧米人によって絶賛され、19世紀中にその評価は欧米の常識となっていた。旅行業界の始祖でもあるクックによる記述は瀬戸内島しょ部の観光地としての魅力とその評価の高さを如実に表す資料でもある。では、瀬戸内はかつてに比べて魅力のない場所になってしまったのだろうか。瀬戸内が世界から脚光を浴びることはもはやないのだろうか。瀬戸内地域が世界の「SETOUCHI」として再認知され、日本を代表する「行ってみたい」場所として再評価されるためには何が必要であろうか。この問いに対して本論文では、瀬戸内における新たな観光業の在り方として「長期滞在観光への転換」を提案したい。瀬戸内の持つ魅力を最大限に感じてもらうためには、まず現状の一極集中・短期型観光からの脱却が不可欠であろう。瀬戸内の持つポテンシャルはどのようにしたら引き出すことができるのか。どうすれば瀬戸内観光に国際性を持たせることができるのか。そこに私たちはどのように関わることができるのか。これらの点について具体的な方策を示し、SETOUCHI 型長期滞在観光の可能性を考えることで、愛媛県のみならず瀬戸内地域全体の活性化への道筋を見出したい。

2、瀬戸内の現状と課題

①データから見た愛媛県の現状

愛媛県の平成 28 年の県外観光客数は 11,502 千人と推定され、二年連続で過去最高値を更新している。うち、5,824 千人（50.6%）は松山圏域に集中している。次に、観光の目的地別内訳でみると買い物物が 29.6%、文化・歴史 17.3%、スポーツレクリエーション 14.8%、温泉が 11.5%となっており、観光の主体は買い物および名所・旧跡めぐりであることがわかる。また、宿泊客数はしまなみ海道の開通時のピークに比べると減少傾向である。これらのことより、他県からの観光客のほとんどが、松山・道後地域を中心とした一極集中的な観光、そして短期滞在型のレジャー系観光をメインとしていることがわかる。また、利用交通機関別内訳をみると自家用車が 60.0%、貸し切りバスが 21.2%とあり、大半が車での来訪であることがわかる。本州四国連絡橋の開通以降はその傾向が強い。広く山がちな四国地域や船での行来に頼る島しょ地域は交通の利便性に欠け、より一層の一極集中・短期滞在型観光化を促す結果となっている。

②実地調査から見た島しょ部の現状

瀬戸内の観光地はどのような魅力があり、どのような課題があるのだろうか。本論文では、愛媛県及び香川県で最もメジャーな観光地である大三島と小豆島を実際に訪れ、観光地の現状と課題について考えた。

まず観光地の現状をまとめてみる。(1) 大三島は多々羅大橋やサイクリストロード、小豆島はオリーブやエンジェルロードなど、自然を活かした観光資源が豊富である。(2) 大三島は大山祇神社や隣接する国宝館、小豆島は二十四の瞳映画村など、歴史や文学を感じられる観光資源がある。(3) 大三島はサイクリング、小豆島はカヤックやボート、釣り堀、貝殻やオリーブの葉を使ったアクセサリー作りなどの体験型観光が行われる。(4) 大三島・小豆島ともに特産品や海産品を活かした料理が美味しい。

以上のような自然や食事の素晴らしさ、歴史の深さに魅了される一方で以下の問題点を肌で感じた。(1) 宿泊施設、娯楽施設が不足しており一部は老朽化も進んでいるようである。中には再建されることなく放置されているものもある。観

観光客が多く栄えている所とそうでない所の差が大きい。(2) 地元の若者が少なく、中年以上の高齢者の数が多い。観光業の担い手も高齢者が多く見受けられ、人口減少と少子高齢化が進み、人手不足が生じているように感じた。農業、漁業、造船業、海運業、製塩業など各種産業も後継者不足が生じていることが予測される。(3) 自然や名所、美術館や博物館を巡る観光が主であり、どのポイントもわりと短時間で終了してしまう。じっくりと見学したり体験したりする機会や仕掛けがもう少し欲しかった。

③長期滞在観光への転換にむけて

実効性のある長期滞在観光への転換を図るためには、①②を念頭に置きつつ、次の2点を踏まえた提案が必要である。

1 点目は、現状の観光スタイルでは特定の観光地における一時的な経済効果は期待できるものの、中長期的にみて地域全体の活性化につながりにくいという点である。少子高齢化が進む瀬戸内地域においては、対処療法的ではない、地域全体に活性化をもたらすような思い切った方策が求められる。愛媛県が発表した「第2期愛媛県観光振興基本計画」によると、本県の観光業の弱みは「人手不足」「施設不足」「他地域との競争力」「交通基盤」「財政基盤」「発信力不足」など多岐に渡っている。既存の観光業に新しい様々な価値観や枠組みを持ち込むことでこれらの弱みを解消するべきである。

2 点目として、現状では外国人観光客の新規またはリピーター獲得を望みにくいという点が挙げられる。いまや日本の観光業は外国人旅行者頼みである。アジア人観光客が四国地域の外国人観光客の60%以上を占めている現状からも、最も効果的かつ現実的なターゲットとしてアジア人観光客を取り込む必要がある。しかしながら、彼らに長く滞在してもらおう仕組み作りは後手に回っている。外国から訪れ滞在しやすい条件を整え、都会では味わうことのできない自然やその島の人たちとの交流の良さを本質的に伝えることで、観光客の増加・長期滞在・リピーターの獲得を目指したい所である。

3、SETOUCHI 型長期滞在観光の展望～「瀬戸内」の価値、再発見～

2章で述べたように、愛媛県（特に島しょ部）の観光地は、観光地自体の人手不足、財政や交通基盤の弱さ、受け入れ設備の不足、他の観光地との競合、情報発信力不足など様々な要因によりそのポテンシャルを生かしきれずにいる。3章ではこれらを克服するために SETOUCHI 型長期滞在観光の具体像を示したい。

①SETOUCHI を船で結ぶ旅

本州と海で隔てられているという点は交通の利便性からすると弱みとされている。しかし、私たちは「海で隔てられている」ではなく、「海で繋がっている」という思考に転換したい。具体的には、「船舶交通による他地域との連結・補完型観光」と「船舶交通そのもののレジャー化」である。

観光地同士を船で繋ぐことで同じ観光客が複数の観光地を訪れ、長期滞在をしてくれる可能性が広がる。そうすれば、広島や香川、愛媛、岡山がそれぞれの観光資源をベースに補い合いあえる。宿泊場所の不足も、島同士で補いあうことで解決できそうである。県単位ではなく、瀬戸内全体で SETOUCHI (Inland Sea) ブランドとして打ち出していくべきなのではないだろうか。数日を掛けて瀬戸内の地域を一周する、というような連結型のツアーを組めば、多くの地域に経済波及効果をもたらすこととなるだろう。他にも、つないだ地域同士で何かコンセプトを持ったツアーを開催することができる。岡山の瀬戸内温泉や愛媛の道後温泉、大分の別府温泉などを回る「瀬戸内温泉ツアー」や、香川と広島、また瀬戸内とは少々離れてしまうが、福岡ともつないで行う「瀬戸内麺巡りツアー」などがツアーの例として挙げられるだろう。四国の港は共通して「大型クルーズの寄港には適していない」という課題については、現状では富裕層を対象にした旅客船「ガンツウ」のように、小型の船に乗客を乗せ、島に乗り降りするというのが最も現実的である。

船の難敵、時間については移動船をまるごとアミューズメント化することで乗り越えたい。ここではあえて、私たちだけの力で現時点での実現はほぼ不可能に近いが、「船上カジノ」という案を提案しようと思う。カジノの経済波及効果はさまざま、2010年にカジノを含む統合型リゾートを開業したシンガポールの観光収入は1兆8億円から1兆8400億円に増加している。それだけでなく、観光客自体も約1000万人から約1400万人に増えている。さらに、シンガポールへの観光客はインドネシアやマレーシア、中国などからが大半を占めており、この論文において取り込もうとしている成長著し

いアジアからの観光客にも一致する。アジアの人たちにとってカジノは日本人よりも身近な存在であるため、抵抗なく受け入れられることであろう。治安の悪化やギャンブル依存症などの問題は船上カジノである故に解決ができるかもしれない。乗船者の身元の確認をすることによって、依存症の疑いがある者の乗船を拒否できるからだ。範囲の狭い船上の方が治安も守りやすそうである。また、船上カジノであれば多くの土地を行き来することになるので、現在注目されている統合型リゾート（IR）と違って特定の地域開発ではなく、寄港地全ての開発に繋がっていく。このほかにも船からの眺望を楽しむなど、「移動時間」を楽しむという発想の持つ可能性は無限にある。

②SETOUCHI 生活を楽しむ旅

ここでは瀬戸内の周遊ではなく、島に固定した長期滞在の在り方について考えてみたい。外国人観光客の中には余暇をゆっくりと過ごしたいという人、日本のおもてなしを体験したい、日本語を学びたいという人が潜在的に存在する。そうしたニーズに島の生活を追体験することで実現しようというものだ。ここでは、外国人観光客が急増している香川県小豆島での実地調査をもとに、島に固定した長期滞在に向けて瀬戸内島しょ部の観光地がもつ価値や魅力を再考してみたい。

小豆島はギリシャ・ミロス島と姉妹島提携を結んでいることもあり、建物や風景に西洋の地中海に似たような印象を受け、“インスタ映え”する（写真1）。近年ではアジアからの観光客を中心に、海外からも観光客が増えている。私たちはその中で長期滞在のキーとなる宿泊施設に注目した。それは民泊である。民泊は島にある旧来の民家をリフォームして、現在の日本の家屋より“日本らしく”仕上げていく（写真2）。

私たちは民泊施設として人気の高い「島宿 真里」のスタッフにお話を聞かせていただいた。その中で伺ったことは、外国人の宿泊客は自国では味わえない体験を味わいたいという人が増加しているということだ。オリーブの収穫の体験や農業体験がその一例である。つまり、これは島の生活そのものがアピールポイントになることを指している。また、日本の家より“日本の生活”が楽しめるという理由でのリピーター客も多く、必ずこの時期になるとやってくる固定客も増えているそうだ。そういったことから、外国人観光客が求めているものは、日本でしか味わうことのできないコト・モノ体験であり、それができるのであれば時間やお金を対価として支払う可能性が高いことが分かる。付け加えになるが、島しょ部には現在、空き家が多く見られ防犯上問題があるとされているが、その空き家をリフォームさえすれば外国人観光客の長期滞在の拠点になる。結果的に観光客と島の地元民両方にとってもウィン・ウィンの関係になるだろう。

①で示したように、様々な島を移動しながら楽しむもよし、②のように特定の場所で体験を深めるもよし、長期滞在観光には様々な形態が考えられるのである。

③学生ボランティアチーム「SETOUCHI」結成に向けて

②で述べたように、SETOUCHI 型長期滞在観光にとって重要な要素の一つが「住民」の協力である。ここでは、それをもう一歩進め「学生」ボランティアが企画・運営に参加する形の新たな観光業の在り方を提案したい。学生が参加することによるメリットは驚くほど多い。

1つ目は、学生は行動範囲が広くフットワークも軽いため、体験型観光の補助員としてはうってつけの存在であるという点である。それに加えて、幼少期から慣れ親しんだ地元のことであれば地域の特徴も詳しく分かっており、学生であっても観光客に対して説明が十分に可能であると思える。香川県ではすでに日本で唯一の「香川せとうち地域通訳案内士」というガイドの制度を創立している。本来、外国語ガイドの資格を取るには国家資格を受けなければならないが、この制度は香川県内に限り一定水準の語学とガイドとしての知識があれば、ガイドとしての資格を獲得できるというものだ。この資格は国家資格よりはレベルが低いため、学生も取得しやすいのである。この制度を瀬戸内全体に広げれば、よりガイドの敷居が学生にとって低くなり、学生がガイドしやすくなるのではなかろうか。



写真1



写真2

2つ目は、広報として即戦力になりうるという点である。現代社会では、様々な方法で観光地をアピールすることができるが、SNSを活用すれば莫大な宣伝効果が期待できるだろう。毎日SNSを使っている学生にとっては、SNSにより情報を拡散することは得意分野であり、早く簡単に、発信することが可能であるといえる。また近年、「Airbnb」という、宿泊先、体験、レストランを自分が行きたい観光地の近くから探して宿泊の予約や体験事業の予約ができるアプリがある。海外ではこのアプリを使っている人が少しずつ増えてきている。このようにアプリ開発やSNSを駆使することで学生と観光客をつなげることは可能であろう。

3つ目は、人件費を削減できるという点である。学生ボランティアをスタッフとして雇うことでコストを安価に抑えることができる。財政基盤が弱い島しょ部の市町村にとっては非常にありがたい話であろう。

4つ目は、観光に訪れる子どもの相手を同世代ができるという点である。この点は長期滞在観光を実現するためにも強調しておきたい点である。子どもの観光ニーズは学生だからこそわかるのではないか。例えば、歴史が好きな子どもには当時の服装に着替えて、仲間となって繰り出すのはどうだろうか。周遊型のプランなら村上水軍のコスプレをして、船に乗り、瀬戸内の島々を移動するのはどうだろうか。同世代の仲間での冒険のようでワクワクすることだろう。島滞在型のプランならば、小豆島で魔女の宅急便をモチーフとして、オリーブ作りやパン作りなどの暮らしぶりを主人公に扮して数日間、体験するのはどうだろうか。このようにして①のような瀬戸内周遊プランや②のような島での生活を楽しむ体験をボランティアスタッフが手伝っていく。この地にやってきたという雰囲気をつくることで観光客はより一層日本らしい雰囲気を味わって変えることだろう。また、大人の手から離れるという体験は刺激的で、彼らを飽きさせることはない。大人にとっても、子どもから目を離し、たまにはゆっくりできる機会は有難いはずである。

以上のように、ツアーガイドや体験スタッフ、企画から裏方まで様々な場面で、私たち学生の発想を取り入れることは長期滞在観光を実現する大きな助けとなるだろう。そして、これらの活動を個別で行うのではなく、瀬戸内地域全体で学生ボランティアチームを立ち上げるのである。

当然これらはボランティアであり無償の活動ではあるが、学生にとってもメリットある活動であれば、活動の持続性や規模が保障できると考える。無償の活動である以上、金銭的な対価を受け取るわけにはいかないが、各地域の特産品の試食や公共交通機関や乗船のフリーパスなど観光に関わる特典をつけるのはどうだろうか。また近年、英語科教育において4技能が重視され受験にも反映されるようであるが、外国人観光客を相手とする場合生きた英語に触れ続けることになり、そのような力をつけるうえでかなり有効であることは間違いない。

4、おわりに

「はじめに」で瀬戸内地域が現状の少子高齢化や課題を脱却し、世界の「SETOUCHI」として再認知されるためには何が必要か、という問いを立てた。この問いに対して本論文では、瀬戸内にしかできない新たな観光業の在り方として「長期滞在観光への転換」を提案し、瀬戸内全域を移動する周遊型の長期滞在観光もしくは島の生活を味わう島滞在型の長期滞在観光の可能性を見出した。具体的には、「島の自然そのもの」を存分に活かせる船による周遊型の観光は、船自体のレジャー化などの移動時間を楽しむ工夫を凝らすだけで可能になること。島に固定した長期滞在は「民泊」など、日本風の家屋に住まい、日本らしい体験をすることで可能になること。そして、そこに対して私たちは「地域をまたいだ学生ボランティア組織・SETOUCHI」を立ち上げ、観光客の子ども相手のボランティア組織を運営し、コスプレを楽しむなど子ども同士だからこそできる観光プランを実施することで長期滞在観光に関わることができると明らかにした。

実は、この提案には本論で述べていない重要な意義がある。長期滞在観光はシビックプライド醸成の機会になるということである。「シビックプライド」とは単なる郷土愛のような愛着だけでなく、自分自身が都市を構成する一員であると自覚し、住む町をより良い場所にしようとする当事者意識や誇りのことを指す。こうした学生のボランティア活動や地元を活かし、観光客をもてなそうとする主体的な観光活動こそが、シビックプライドを育て結果的に永続的な地域活性化に貢献すると私たちは考えている。